ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　一人称が変わる時は、どんな時だろう？

　生まれてからずっと、自分自身の呼び方が変わらない人なんて、ほとんどいないはずだ。人は誰しも、自分の一人称を変える頃がやってくる。

　自分のことを『ぼく』から『俺』に変えたのは、いつのことだったか……少なくとも、最近じゃないこと、そして、そんなに昔のことでもないのは確かだ。

　ここは、異次元空間『トラース』。

　地球とよく似た空間ではあるけれども、あくまでよく似ているだけで、ここは地球じゃない。別物だ。だから、ここには、地球を交互に見守ってくれている太陽や月はない。その代わりに、太陽にあたる『クラスタ』と、月にあたる『フォルス』と呼ばれる球体が、この空間の上空に、交互に輝いている。

　それでも、今俺がいる、この森のように、木に生い茂る葉っぱのせいで、光が届かない所もある。『クラスタ』や『フォルス』のお陰で、ここは地球のように朝昼夜があるけど、この森はいつ来ても薄暗い。『の森』。それが、この森に付けられた名前だ。

　俺、『ロラン』は今、この『暗灰の森』で戦っていた。

　目の前にいる、黒い鉄――いや、正確には鉄じゃない別の物質で、色も俺の目には赤く見えるが――の塊が、俺にナイフを振り下ろす。もう、何度も見た光景だ。二年前、俺を苦しめたロボットが、前に二体、後ろに二体いた。二年前から俺も随分背が伸びたけど、それでも、まだこいつらの背の高さには全然届かない。まぁ、俺とこいつの戦闘力を数値化し、棒グラフにでもすれば、今は俺の方がずっと背が高くなるが。

　心地よいＢＧＭが聞こえる中、振り下ろされた右腕を、俺は慣れた動作でひょいっと右にす。あれから、俺はこのロボットと数え切れないほど戦ったので、倒すコツは体に染み付いている。一・八メートルほど離れ、そのロボットの背後をとり、俺は両手に持った白刀を振りかざし、ガラ空きの背中に右上から切りつける。いや、もう『切りつける』ではなく、『斬りつける』と言っていいだろう。あの頃とは違い、俺も随分、この刀達の扱いには慣れた。いや、まあ、まだお姉様のように、片手で振り回せるには至っていないが、それでも、あの頃の俺の実力とは雲泥の差だろう。

　俺の視界の世界で数少ない、赤くない光が、ロボットの体に触れる。そして、触れた瞬間、ロボットの動きが止まった。目の代わりの球体が、一瞬にして、その赤い光を失う。

「この白い刀身は、お前の魂を、痛みより早く浄土に還す」

その上半身が、ゆっくりと下にスライドする間、俺はそう呟いた。そして、残りのロボットを睨む。

残り時間、後一分。

　こいつらを片付けるのに、一分もあれば全然余裕だ。俺は、自分の口角が上がるのを感じた。

　刀身が振り回される白い残像と、俺の通った跡に残る二つの赤い残光が、俺の視界を駆け巡った。